

## 温かな無関心

追手門学院高等学校 池田真菜

人からの視線が辛い。前髪はおかしくないか、自然に笑えているか、馬鹿だと思われてはいないか。かわいくて賢くて優しい女の子だと思われたい。たとえ少しでも醜いだとか、あか抜けないなどと思われた日にはもう耐えられない。もしそうなったら誰にも気づかれずにそっと死んでしまいたい。

ある日、ちいさな病原体は私たちの前に現れた。まったくもって予測不能な、衝撃的な出来事だった。

彼らが私にもたらした「不自由」とはなんだろう。まず、外に出られない。出られたとて、カラオケや映画、テーマパークはもちろんライブなんてもってのほか。すべて「不要不急」なのである。机をくっつけて食べるお弁当が懐かしい。部活も活動停止になった。

では、逆に彼らが私に与えた「自由」は何か。それは自意識の檻からの解放であった。一日中家にいるのだから誰の目線も感じることは無い。私は「かわいくて賢くて優しい女の子」を放棄することができた。長い時間を使って自身と向き合うことができた。本当に大切なものは何か、本当の自分とは何か。

学校が始まると、下半分が白で覆われた顔がずらりと並んでいた。なんだ、私が今まで固執してきたものはこんなにもあっさり意味をなさなくなってしまう。私はそれまで着込んでいた「かわいくて賢くて優しい女の子」の鎧を脱ぎ捨てた。思えばその鎧は私の体を重くこそすれ、守ることは無かったのだから。

自然体の自分であるというのは己を曝け出すということでもあり、もちろん恐怖もあった。しかし、得たものは大きかったように思う。なぜなら、私は学校という社会に与えられた生徒というロールを全うするなかで、他人にも自分のこうあるべきだ、という像を押し付けていたということに気づいたからだ。自分を尊重できなかったことで他者を尊重することもできなくなっていたのである。

自由と尊重は切っても切れない概念である。自由とは、自分勝手に他者へ迷惑をかける権利ではない。顔を持たない世間からいつの間にか着せられた鎧を、この意志と尊厳をもって脱ぎ去り、好きな服を着る権利である。自己の自由を認めるときは、他者の自由もまた認めなければいけない。

私たちがこのパンデミックから学ぶべきは「無関心」なのではないだろうか。女子はかくあるべきだ、男たるもの云々。そんなこと、どうだっていいではないか。私たちは女子ではない。名前を持った誇り高い個人なのだ。隣の人を気にしない。それがまわりまわって己に向けられる視線を和らげることに繋がる。私は「無関心」こそが尊重、という言葉の意味の本質であるように思う。

新型コロナウイルスによって、表面的には自由が奪われたかもしれない。しかし、この経験から何を学び、何を思い、これからの社会をどう切り拓くか。元通りの生活、ではなく、あたらしく自由な生活へ。そこに歩みを進められるかどうかは私たちにかかっている。そのためにも私は、隣人への温かな無関心を心がけていこうと思う。